

「私はゾンビと歩いた！」 戸巻 夕夏

「私はゾンビと歩いた」というミステリアスな独白から始まる本作は、『キャットピープル』などホラー映画史に名を連ねる作品を手がけた、ジャック・ターナーの監督作だ。

砂糖農園を営む男の妻を看護するため、雪が降る国から南の島・ハイチへと渡る看護師ベッツィ。彼女が乗り込んだ船では黒人たちの不気味な低い歌声が響き、同じく船に乗り込んでいた農園の男・ポールは、彼女にこの先に待ち受ける死や闇を暗示する。南の海に輝く波や晴れやかな空と相まり、なんともアンバランスな印象を与える。

ハイチの屋敷には、熱病にかかりゾンビとなったポールの妻ジェシカと、彼女に横恋慕していたポールの腹違いの弟・ウェズリーが住んでいた。ベッツィにあてがわれた部屋には大きなブラインドの仕切りが作られており、その影が落ちた彼女の表情には、ホラー映画でありながらフィルム・ノワールのコントラストの強い画調と緊張感がある。

ゾンビを始めとしたブドゥーの呪術を描き、それに巻き込まれていくベッツィらの恐怖を題材に取った本作は、序盤の船のシーンから、音をかなり効果的に使っていることがわかる。農園で時間を知らせる太鼓の音やブドゥーの儀式の歌、ポールの弾くピアノの音など、オフスクリーンからベッツィ、そして観客を次の展開へと誘う音にあふれている。屋敷に響くそれらの音は、農園を直接描くことなくその広大さを我々に想起させ、島の開けた自然や空気を表現する。広大な自然の美しさは、その後ブドゥーの儀式へとベッツィがジェシカを連れて歩くススキの草原、ラストシーンの海岸の風景で直接描かれ、一人取り残された黒人のゾンビが白波のなか立ち尽くすという印象的なショットを生む。

プロット面で気になった点としては、本作が現在のゾンビとは異なる性質の、原始的なゾンビものホラー映画でありながら、それと少し異なるような、宗教の混淆状態が起こっていたのが興味深かった。おそらくキリスト教徒である屋敷の住民たちが、異教の先住民に脅かされ、目を見開いたまま迫ってくるゾンビという恐怖を体験していくのだが、ブドゥー信仰の彼らの中心にいたのは、西洋医学的な衛生観念を伝えるために正体を隠していた異教徒で医師の女であった。本作の恐怖の根源たるブドゥー教の指示役が、実は恐怖を受ける側の人間であるという、不思議な構造になっていたのだ。その事実が明らかになった途端、理解し難く不気味なブドゥー教はベッツィらにとって、コントロール可能で対抗できる脅威となる。ホラー映画の『私はゾンビと歩いた！』はここで終了し、屋敷の兄弟とゾンビの妻の三角関係が引き起こす悲劇の物語に方向転換していく。

物語が収束していき、主人公たるベッツィが全くその帰結に関わらないというプロットは観客として少なからぬ薄味さを感じてしまったが、“I walked with a zombie”という原題からして、この体験的な巻き込まれ型のプロットは意識して作られたものではないかと思われる。派手なホラーではない本作が当時大ヒットしたと聞くと意外なように思えるが、恐怖体験の場に巻き込まれる主人公という身近さや、ホラーだけではないジャンルの広さが多くの観客に受け入れられたのだろうか、とも考えられる。